

## (1) 「中高一貫校からみた高大接続改革」

名古屋大学教育学部附属中・高等学校副校長 山田 孝

私は歴史の教員で、近現代史を教えているものですから、先ほどの佐々木先生の話聞いて思ったことは、戦前大本営発令を信じて突撃し、南方戦線に送られてそのまま退路を断たれ、補給物資もなくなって孤立してしまった歴史があったことでした。今日もお話を聴き、危惧を覚えながらも、でも、私たちの進む道を進んでいこうと思います。

### 附属学校の概要

では、まず本校の概要です。国立の附属学校です。国立の附属学校は幼・小・中・高・特別支援学校を含めて全国で約260校ありますが、その中、中高一貫校は5校しかありません。そのうち4校が中等教育学校で、あと1校が本校であり併設型の中高一貫校です。併設型というのは、中学校と高等学校の接続の段階で、公立中学校等から生徒を受け入れる中高一貫校です。本校は、中学は1学年2クラスの6クラス、高校段階で試験により公立中学等から1クラス入ってきて、高校が1学年3クラスの9クラスになります。併設型中高一貫校であり、完全な中高6年一貫校でないと言うことが、本校の特色でもあります。

まず、本校の教育内容についてお話ししたいと思います。その前に国立の附属学校の使命をご説明します。附属学校の使命としては、大きく2つあります。1つは先導的な教育実践に取り組むということ、もう1つは、教育実習に取り組むということです。この2つを日常的に行う以外は、基本的には他の学校と変わりありません。文部科学省の研究開発や教育実習を行いながら、普段の教育にも取り組んでおります。

本校が目指している教育は、完成教育を重視する中等教育であり、男女共学で、非エリート化の教育です。そして本校の利点の一つは名古屋大学のキャンパスの中にあるということです。これは、何時でも名古屋大学のリソースを活用できることです。それから、生徒の自由な学びがあります。これも大学のキャンパスの中にあり、自由な空気を体感できるからでもあると思います。ただ、自由といっても、何でもかんでも自由というわけではないのですが、自主性を尊重するような校風があります。生徒の個性伸長を目指していく。これもカリキュラムの中に反映されています。それから、全校合わせても600人しかいない小規模な学校です。生徒の顔が大体思い浮かぶぐらいの、小さな学校です。

完全な中高一貫校ではなく高校から1クラス入ってくるので、中学から高校に上がるときに適度な緊張があります。これは、完全な6年一貫の中等教育学校にはない特色だと言えます。入ってくる子たちも緊張しているのですが、実は、中学から上がっていく80名も緊張しています。双方がいい緊張感を持って高校生活を迎えます。中学から高校に上がった子たちが、高校から入ってきた子たちにいろいろなことを教える、お互いに教え合いながら、働き掛け合いながら、高校で学び合っていくということころも、いいところではないかなと思います。

次に特色のある授業に、ソーシャルライフがあります。ソーシャルライフの授業も、これはもう随分前から始めているのですが、人付き合いの方法を学ぶというソーシャルスキルを中1の段階から始めます。後でまた出てきますが、総合人間科という総合学習の授業もあります。今では

総合的な学習の時間と言っていますが、1995（平成7）年から本校が始めた時は、特設教科「総合人間科」として設置していました。それが指導要領の改訂のときに総合的な学習の時間となって組み込まれたものです。また、協同的探究学習という、協同で学び合うという取り組みも教科の中でやっています。融合カリキュラムとか中高交流学习のような、中高一貫校としての取り組みもあります。

正式に中高一貫校になったのが2000（平成12）年からです。そのときに教科指導も見直すことになり、単に知識注入型ではない授業を目指してきました。そのもとになっているのが、総合人間科での3つの「脱」ということになります。3つの「脱」とは、「脱教科」、「脱教室」、「脱偏差値」のことです。教科の壁を越えて、総合人間科で取り組もう、教室から出てフィールドワークに行こう、専門家の話を聞こうと。それから、生徒たちを偏差値で見るのではなく、もっと多面的に評価する取り組みを総合学習の中でやっていましたが、それをさまざまな教科の中でも取り入れていこうということになりました。

また、生活指導としても、中高一貫校ですから、中高6カ年を見通した指導にも取り組んできました。入試方法も変えました。中高一貫校になったときに、国会の附帯決議で、学力試験をやってはいけない、受験競争を過熱させてはいけないということになり、いわゆる答えが1つになるような問題は作らないようにしました。1 + 1 = 2という問題ではなくて、どうやって解いていくのか、考え方を問うような問題を中学入試＝中学検査で取り入れています。

それが本校の「入学者選抜方法」の検査Ⅰで、小学校6年間で学んだ内容を総合的に判断し、学力試験によらない選考をしています。検査Ⅱで作文。これは、単に感想を書くのではなく、課題を読み込んで、そこから自分の考え、意見をまとめるといった内容です。それから、検査Ⅲはグループ面接、グループワークです。グループで課題に取り組みせ、それを発表させ、その後面接をします。この検査Ⅰ、検査Ⅱ、検査Ⅲを通じて、中学の生徒を選考しています。高校については、3教科の試験や作文で選考します。

このように、併設型の中高一貫校になったときに中学入試の在り方も変え、学校の教科の中身も見直して、併設型の中高一貫校としての現在があります。

最後にもう一度本校の特徴について、先ほども少し説明しましたが、自由・自主を尊重し、個性豊かなで主体性がある生徒、そして基礎学力も充実させる。自立する力。総合人間科を設立したときのテーマ自体が、「自覚的に人生を選択する力を育てる総合人間科の取り組み」でしたので、それに沿って、本校の授業・教育を進めているところです。

## 特色ある取り組み

特色ある取り組みということで、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）。文部科学省のウェブページでもすでに発表されていますが、3期目が認められました。もちろん、これまで2期10年取り組んできましたが、またこの後5年も取り組んでいきます。

本校の授業の根幹は総合人間科です。その上に、2015（平成27）年度から豊かな国際交流に取り組むスーパーグローバルハイスクール（SGH）にも取り組んでいます。

SSHは名古屋大学との協同で取り組みが行われています。知的好奇心、深く理解し、考え、発表する力、人や社会のために学習内容を活用する力、大学の専門的な研究につなぐ学びの力、自

分の生き方について考える力等々について、SSHの中で取り組んでいきます。

スーパーサイエンスという、いわゆるスーパーな理系の人間をつくるというような印象を与えます。それを否定はしないのですが、本校が考えているスーパーサイエンスというのは、誰もが理科が好きになるようなものを目指しています。トップの人たちを生み出すには、やはり裾野を広げていかないと高い山はできませんので、理科好きの子どもたちをつくっていこうと取り組んでいます。特別にスーパーサイエンスのクラスを作るのではなく、全員にスーパーサイエンスの授業を行っています。オプションとして、アドバンスト・サイエンス・プロジェクトを作って、さらに大学の先生の授業を受けるような取り組みも行っています。

本校の中高一貫の課程は、1・2・2・1制です。中学の1年が入門基礎期、2・3年が個性探究期。ここで一回切れて、高校1・2年で専門基礎期、高校3年生で個性伸長期という分け方をしています。その中で、SSHのプログラムとして、SLP I（サイエンス・リテラシー・プロジェクト I）、SLP II（サイエンス・リテラシー・プロジェクト II）、ASP（アドバンスト・サイエンス・プロジェクト）。今回またスーパーサイエンス3期目に入りましたので、この名称が変わってきます。SS（スーパー・サイエンス）課題研究に名前が変わっていきます。

SLP I、SLP II、ASPで何をやってきたかということ、中学では好奇心を揺り動かしてサイエンスの基礎をつくる。中学2年生、3年生で、ものづくり講座などを選択の授業で置いています。それから、高校1年生、2年生では、自然と科学、情報と社会。ここまでは全員で受けるもので、その他、ASP（アドバンスト・サイエンス・プロジェクト）があります。もっと興味関心のある子が選択をして受けるものです。来校していただいた大学の先生の授業を受けます。また「学びの杜・学術コース」というものがあり、土曜日や夏休みに実施しています。

これが全体像です。併設型中高一貫校6カ年の計画の中にSSHの企画がらりばめられています。

スーパーサイエンスの企画としては、「基礎セミナー」もあります。大学の1年生が受ける初年次教育に本校の高校2・3年生が、限定人数ですけれども、参加することができます。それから、高大連携プログラムでは、中津川の研修センターで、高校生が2泊3日で、大学の先生による最先端の授業を受けることができます。あと、生徒研究員制度があり、様々な研究グループで、授業の他、課外活動として行っています。現在は、色素プロジェクト、スライムモールドプロジェクト、チャンドラセカールプロジェクト、ヒドラプロジェクト、数学プロジェクト、相対論・宇宙プロジェクトがあります。

SGHプログラムでは、今年度から始まった企画ですが、自立した学習者を育てる探求型カリキュラムとして課題研究 I（中学）があります。これも総合人間科の中でやっているのですが、自分でテーマを見つけて、1年間そのテーマについて調べていくという授業です。中学1年生は「生き方を探る」、2年生は「生命と環境」、3年生は「国際理解と平和」ということで、1年間このテーマで調べ学習をし、フィールドワークを年に1回実施し、最後は報告書をまとめていきます。

高校では6つの領域の中から1つを選んで、3年間継続して学んでいきます。自分で研究テーマを調べます。＜心＞教育・心理、＜文化＞言語・芸術・表現、＜自然と環境＞地球・食料・エネルギー、＜人権と共生＞生存・差別・障害、＜生命＞健康・医学、＜平和＞紛争・民族・国際理解、以上6つの領域の中から自分で1つテーマを選んで、3年間、調べていきます。以上が附

属学校の探究型カリキュラムの内容です。

### 「最終報告」について

最終報告についてですが、学力の3要素というのには大変期待をしたのですが、佐々木先生の話によると、なかなか難しいのではないかというのが感想です。本校は、自ら課題に取り組み、解決していくということを、以前から取り組んでおり、これからも取り組んでいこうと思っています。このように、私たちが取り組んできたことが、この最終報告書の中で評価されたら嬉しいなという気持ちもあります。

さらに、この報告書にある、この3つの学力を踏まえて、大学入学希望者学力評価テストが作成されれば、本校がやってきたことがかなり役に立つのではないのかなと期待をしているのですが…。実際話を聞いてみると、どうなのかなと思っています。ただ、私たちがやってきたことは、生徒が主体的に学び、課題について取り組み、自分で問題解決に取り組んでいくという姿勢を随分育ててきたと思いますので、この最終報告書がどうあれ、私たちの教育はこのまま続けていきたいと思っています。そういった理念が生かされて、このままの改革につながることを期待したいと思います。

今回、時間がありませんでしたので、学習指導要領の改訂まで踏み込むことができませんでした。本校が取り組んできたことを中心にしながら、今後に期待することを発表させていただきました。どうも、ご清聴ありがとうございました。